

SHUKAWA MINA + ⊕
⊕ R G E L

朱川湊人

オルゴール



講談社
文庫





講談社文庫

常州大学图书馆
藏书章

朱川湊人

講談社

著者 | 朱川湊人 1963年、大阪府生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。出版社勤務を経て、2002年に「フクロウ男」でオール讀物推理小説新人賞を受賞しデビュー。'03年には「白い部屋で月の歌を」で第10回日本ホラー小説大賞短編賞を、'05年には『花まんま』で第133回直木賞を受賞する。著書に『かたみ歌』『箱庭旅団』『サクラ秘密基地』『満月ケチャップライス』など多数。

オルゴオル

しゅかわみなと
朱川湊人

© Minato Shukawa 2013

2013年4月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277507-6

オルゴオル／もくじ

呪いってあるのかな	8
一生に一度のお願い	32
鳴らないオルゴール	56
ハングリーな夜	79
旅立ちは三月	102
西へ、西へ	124
大阪でっせ！	147

いつか、いたところ
169

悲しい場所
193

見参、電撃ガール
216

チクチクするよ
241

寂しい夢を見た
264

夜を走るバス
287

広島、晴れた日
296

一人で行くんだ
320

ずっと、ずっと知っておくよ

344

鹿兒島、到着！

368

桜の家を探せ

391

心のオルゴール

415

こんな雨の夜に

442

解説 高濱正伸

454



講談社文庫

オルゴオル

朱川湊人

講談社

オルゴオル／もくじ

呪いってあるのかな	8
一生に一度のお願い	32
鳴らないオルゴール	56
ハングリーな夜	79
旅立ちは三月	102
西へ、西へ	124
大阪でっせ！	147

いつか、いたところ
169

悲しい場所
193

見参、電撃ガール
216

チクチクするよ
241

寂しい夢を見た
264

夜を走るバス
287

広島、晴れた日
296

一人で行くんだ
320

ずっと、ずっと知っておくよ

344

鹿兒島、到着！

368

桜の家を探せ

391

心のオルゴール

415

こんな雨の夜に

442

解説 高濱正伸

454

オルゴ
オル

呪いつてあるのかな

（あいたたた……）

なぜか昼近くになってから、右膝がジンジン痛み出してきた。

階段で転んだのは朝なのに、どうして今になって痛くなるんだろう。もしかしたら内出血でもしているのかもしれない。最悪、骨にヒビでも入っていたら、どうしよう。

（やっぱり……呪いなのかも）

机の下で膝を撫でながら、ハヤトは思った。頭の隅に、どこか恨めしそうなトンダじいさんの顔が浮かんで消える。

「この教室でみんなと過ごすのも、今日が最後だ」

教壇ではアキヤマ先生が、のそのそ歩きながら話している。珍しくジャージではなくジャケットを着ているけれど、水に濡れたコンクリートみたいな、パツとしない色

だ。

「一緒に過ごした二年間、先生は本当に楽しかったよ。みんな、明るい子ばかりだったからな。ちよつと元気が良すぎるところもあつたけど」

今日は四年生三学期の終業式——三年生から持ち上がりで二年続いた、このクラスが終わる日でもある。

すでに模造紙に書いたクラス目標、時間割、掃除当番表などの掲示物が取り払われ、教卓の上に積み上げられていた。クシヤクシヤに丸めて捨てるのも寂しいからと、先生がそこにまとめさせたのだが、きつとみんなが帰った後に捨てるのは変わらないだろう……とハヤトは悟つていた。

「最後に担任として、大事な話をしておこう。教科書の勉強より、ずっと大切なことだ」

アキヤマ先生はそう言うときョークを持って、きれいに拭いたばかりの黒板に大きく『人』という文字を書いた。

「いいか、人という字をよく見てごらん」

「長い棒と短い棒が支えあつてゐるってんでしょ」

「だつせえ！ 古いよ、そんなの」

何人かの男子生徒が野次を飛ばすと、クラス全体が急にぎわめいた。

「おいおい、最後ぐらい、ちゃんと話を聞け」

アキヤマ先生は困った顔をして、両手で空気を押さえる真似をする。オーケストラの指揮者のようだけれど、なかなか静かにならない。机をガタガタ揺らして、意味なく耳障りな音を立てているヤツまでいる。

「どうして、おまえらは、いつもそうなんだ。四月には五年生だろうが。何でもかんでも、バカみたいに騒ぐんじゃないよ」

さつきは明るい子ばかりだったと褒めたくせに、先生もいきなり正反対のことを言う。

「だって俺たち、まだ四年だもーん」

「先生が生徒のことを、バカとか言っているのかよお」

膝はジンジン痛むけれど、ハヤトも一緒になって叫んだ。こういう空気には早く乗らないと、何だか損をしたような気がするからだ。

「とにかく、ちよつと聞け」

先生はいい加減、ウンザリした顔で言った。

「知っている人は、黙って聞いてろ。知らない人も、いるかも知れないだろうが……」